

陳舜臣さんを語る会通信

NO.108 Dec. 2023

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34
橋雄三方「陳舜臣さんを語る会」
Tel.078-911-1671
編集「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員
発行日 2023年12月1日
<http://www.eonet.ne.jp/~yuzo/>

陳舜臣さん初めての長編エッセイ 1971年刊『日本人と中国人』

前号から5ヵ月ぶりの108号です。本号で紹介する『日本人と中国人 — “同文同種” と思いこむ危険』は1971年、書下ろしで、祥伝社からノンブックの一冊として出版されました。本号の発行は安井三吉先生のご助言、情報提供の賜物です。
(編集委員 橋雄三)

『日本人と中国人』「まえがき」抜粋引用
傍線は編集委員の加筆

これは私の、はじめての長編エッセイである。

だいぶ前に、自分の住む神戸のまちを紹介する本を出したが、そのときはエッセイを書いたという気はしなかった。いちど小説に書いたアヘン戦争を、最近、実録として一冊の本に概説したが、これはむしろドキュメンタリーのジャンルに属するであろう。

短いエッセイなら、ずいぶん書いてきた。いちいちおぼえていないけれども、最初のそれは、やはり記憶にあざやかにのこっている。私の小説の処女作が出版されたのは、昭和三十六年十月のことだが、随筆の処女作は、その年の十二月の朝日新聞にのったものである。大阪本社からの依頼であったが、東京版にも掲載された。分量は四枚で、与えられたテーマは『歳末風景』であった。そのなかで、私はつぎのようなことを述べた。

陳舜臣さんは、『歳末風景』のなかで、冬至には、一家、ダンゴを食べ、ダンゴを食べると書いて、ところが、新聞記事を見た広東出身や北京出身の友人から、自分にはそんな習慣はないと言われる。どうやら、冬至にダンゴを食べるのは福建と台湾に限られるとわかり、陳さんは執筆に拔かりがあったと反省し、気を落とす。

何年か前の思いがいを、ここに『まえがき』として披露する。この本の内容についても、私はおなじ種類の錯誤を再び犯しているかもしれない。裏づけがあると思っただけのことだが、ほんとうはその根拠が薄弱、または誤っていたというケースもあるだろう。あらかじめ読者にそのことを、念頭においてもらいたい。あとで咄られるかもしれないのに、私はあえてこの本を書く。

一人の日本育ちの中国人が、物心ついな習慣はないと言われる。どうやら、冬至にダンゴを食べるのは福建と台湾に限られるとわかり、陳さんは執筆に拔かりがあったと反省し、気を落とす。

歳末異邦人風景

えと文 陳 舜 臣

冬至…もち…爆竹…

するのにな、その日だけお祭りの気分がする。古きよりの風情が、中国の冬至の味は、日本の冬至を思わせる。今ではほとんど完全に日本化してしまっている。冬至の風情が、中国の冬至の味は、日本の冬至を思わせる。今ではほとんど完全に日本化してしまっている。冬至の風情が、中国の冬至の味は、日本の冬至を思わせる。今ではほとんど完全に日本化してしまっている。



昭和四十六年七月一日 陳舜臣

たころから中国と日本のことを、つねに考えねばならなかったことから、それについていくばくかの蓄積があると思いい、他人にもそれを知ってもらいたいのである。日本と中国の相互理解に、すこしも役に立てばと思つて。

日中の友好のうえにしか、この本の作者には安住の場所がない。冬至のダンゴのごとき陥穽が、あちこちにあることはよく知っている。その危険を進んで冒そうとするのは、やむにやまれぬものがあるからだ、その熱気をなだめつつ筆を進めることにした。

(9) 7版 昭和36年12月22日 金曜日

冬至は、お祭りの気分がする。古きよりの風情が、中国の冬至の味は、日本の冬至を思わせる。今ではほとんど完全に日本化してしまっている。冬至の風情が、中国の冬至の味は、日本の冬至を思わせる。今ではほとんど完全に日本化してしまっている。

冬至は、お祭りの気分がする。古きよりの風情が、中国の冬至の味は、日本の冬至を思わせる。今ではほとんど完全に日本化してしまっている。冬至の風情が、中国の冬至の味は、日本の冬至を思わせる。今ではほとんど完全に日本化してしまっている。

『日本人と中国人 ― “同文同種” と思いこむ危険』 目次

まえがき

第一章 日本人と中国人に関する一問一答

— あなたは一体、どれだけ知っているか？

第二章 唇と歯——つきあいの歴史

— 中国の古典から見た日本の歴史

1 どうでもよかった隣人

淡泊な隣人同士から不幸な隣人関係へ

2 合図の扇

日本で発見された“幻の本”『両朝平攘録』

中国人はカタログマニア、日本人は保存の天才

3 旗のほまじ

辮髪と月代は同じものだ

“満洲”という言葉に不快感を持つ中国人

第三章 “面子”と“もののあわれ”

— 決定的なちがいは、日本に黄河がなかったこと

1 猫も杓子も

中国人に衝撃を与えた「祈戦死」の幟

鉄砲伝来から百年で日本は銃弾の輸出国に

2 胡服騎射

軍服ひとつ決めるのに王を手古ずらす

3 おなじ根

「黄河の治水」こそ聖人の資格

中国的無神論の帰結が“面子”

4 この差

日本文学の根“もののあわれ”

“以心伝心”より“説得”を重視した中国人

第四章 ことだま

— “同文同種” と思いこむことの危険

1 道しるべ

日本にとって中国は“打出の小槌”

2 ちよつとぼかす

“道しるべ”を立てた民族とそれに従った民族

日本人の短気は日本語が原因

日本語はあまりにも明晰すぎる

3 同文同種に甘えるな

“殺”とは“殺す”ことではない

両国語のニュアンスについて理解を深めよう

第五章 “血”と“文明”

— 日本文明の源は“血統への信仰”にある

1 尊血主義

“血”への信仰の頂点が“天皇家”

日本だけの怪現象“家元制度”

2 文明は中原より

“中華思想”は“尊血主義”ではない

“中国”とは“宇宙の中心”という意味

3 文明の周辺

“文身断髪”さえすれば、たちまち“蛮族”になる

“天に二日なく、地に二王なし”のしきたりと蛮夷

4 決定的なもの

“中華”と“夷狄”の差は決定的ではなかった

日本ほど“差別”のきびしい国はない

祥伝社ノンブック
表紙

目次、いくつかの補足

■第五章 “血”と“文明”

1 尊血主義

“血”への信仰の頂点が“天皇家”

日本だけの怪現象“家元制度”

では、陳家のルーツは中原潁川で陳舜臣さんは33世と言ったりするのは何なんだろう。日本で系図を尊重するのは天皇家、諸々の家元ぐらいで、一般人に“血”への信仰はないが…。

陳家の墓碑に見える
“潁川”の文字■第八章 われら隣人
2 竜と鳳

竜も鳳も、もとは部族のシンボル・マーク、すなわち民族学というテーマであらう。

怪奇な『竜』の部族はおそろしく、実在の鳥とあまり異ならない『鳳』の部族はおとなしいのか？ いや、じつはその正反対なのだ。

これは面白い。『龍鳳のくに』と併せ、是非一読を。

『日本人と中国人 ― “同文同種” と思いこむ危険』 目次(続)

第六章 “完全” と “不完全”

―― バランスを尊ぶ中国人と、

アンバランスを好む日本人

- 1 石をこわす人たち
- 2 モラエスの悲劇
- 3 シンメトリ（相称性）

第七章 “人間くささ” と “ほどのよさ”

- 1 羅敷さんの歌
- 2 人間さま
- 3 自殺の作法
- 4 政治すなわち文化

中国人の“形式主義”は“人間信頼”から生まれた
中国人は、詩を最高の文学とみなす

“形式主義”の極致が中国の仏教芸術
日本の仏像は肉体の躍動を伝える

- 3 自殺の作法
- 4 政治すなわち文化

三島由紀夫の死には人間臭がない
日本人の“自殺”は“もののあわれ”に通じる

無意識のうちに対句を用いる中国人
文章は経国の大業

第八章 われら隣人

―― 長短相補う国家、そこに摂理が…

- 1 名と実
- 2 竜と鳳

顔をふく時、タオルを動かすか、あるいは
中国人が最も信頼するものは“歴史”

竜の人間に鳳的性格を呼びました毛沢東
人間の力をもってすればすべてが可能



祥伝社新書版「あとがき」抜粋引用

傍線は編集委員の加筆

本書の初版は昭和四十六年（一九七一）に世に出た。もう三十数年になる。

私の視野でとらえた日本と中国をテーマにするが、文中にもふれたように、版元はできるだけ時事のを取り上げてほしかったらしいが、私はできるだけそれから離れようとした。「眼前の問題を追うあまり、水面にうかんだ屑や泡を掬い取るだけに終わるのをおそれる」と、私はその理由を説明している。

時代はちょうど日中国交正常化で、ときの田中角栄首相が中国へ行き、毛沢東主席や周恩来総理と会談し、ちよつとした中国ブームがおこっていた時期であった。私のような者のところにも、そんな時事にかんするエッセイを依頼する申し込みが多かった。

国交正常化以前は、中国へ渡航することもできなかった。だから日本生まれの私は、戦後三年半ほど台湾で教職に就いたほか、香港取材で行っている程度で、大陸での居住経験はまだなかった。そのことが、私に執筆をためらわせた。しかし私は『人』を書くのである。台湾で多くの人に会った。中学の同僚にも大陸の人はいたし、神戸でも私は中国人のグループに囲まれて生活した。

本書執筆後三十数年、私は数え切れないほど多く中国の土を踏んだ。その結果、本書に訂正すべき箇所はほとんどないかわかり、時事を避けたことは正解だとわかり、

胸を撫でおろしている。

なにしろ四十歳代の若書きであり、表現に不適切なところがあり、それは訂正させていただいた。

二〇〇五年七月

■傍線の最後、なにしろ四十歳代の若書き

であり、表現に不適切なところがあり、それは訂正させていただいた。とあります。

本号冒頭に記した安井先生のご助言、情報提供もこの点に関係しているかも知れません。初刊本と新書版を比較し、指摘されています。

その四箇所を次ページにあげました。

先生は、「初刊本と新書版では文革の扱いに微妙な変化があります。天安門事件は、その転換点ではないか、と推測しています」とおっしゃいます。

私には、そこまではわからないが、陳舜臣さんの文革観に多少の変化があったと思っています。



祥伝社新書版表紙

『日本人と中国人』1971年初刊本と2005年出版本の違い

1 (初刊本 p.26)

打倒という一直線の道しかないのに、その道を行こうとしなかったのです。おそらく、『打倒』といった品のわるいことばを、胡適はきらったのでしょう。

魯迅が『狂人日記』をかいたのは五・四運動の前年ですが、そのテーマは、

——礼教（儒教体制）は人を吃う。

ということにあったのです。

文化大革命が『反儒運動』のしめくり

文化大革命は、『反実権派闘争』の形をとりましたが、実権派は官僚組織に住んでいたもので、官僚組織は儒教体制の遺産にほかなりません。

文化大革命は、どうやら太平天国、五・四運動につづく、第三波の反儒運動で、ここでカタをつけねばならないという、なにかせば詰まった闘争のように思えます。

儒教体制を打倒することは、ふるい中国を捨て去ることです。捨てなければ、新しいものは生まれません。中国を救うのは、この方法しかなかったのです。

大切なのは打倒することですから、その武器は問うところではありません。太平天国のときの武器はキリスト教で、五・四運動のときはデモクラシーとサイエンスで、文化大革命のときのそれが、マルキシズムといえるでしょう。

2 (初刊本 p.88)

の民謡をあつめ、孔子がそのなから三百篇をセレクトしたものだ。ちょうど、ギリシャでホメロスの叙事詩が成長しつつあった時期にあたる。

この詩経の国風（諸国民謡）の注をついた吉川幸次郎氏は、国風百六十篇のほとんど全部が誰かにむかっただけである、ときわめて明解に述べておられる。立派な君主をたたえる、あるいは暴君をそしめる、あるいは恋人に呼びかける。……いろんなタイプはあるが、すべて人間への呼びかけであって、直接、神へ呼びかけて訴えるといったものは見当たらない。

——彼の若き者は天

ということばが出てくる詩があるが、それも天に呼びかける形式ではない。自分はいま不幸であるが、これは天のせい、運命のせいである、といって誰かほかの人間に訴えているらしいのだ。

文化大革命は大がかりな『説得運動』

太古の時代から、中国人は運命や天などに泣きことをならべてもはじまらない、訴えるべき相手はあくまでも人間——黄河の氾濫を食いとめるような、そんな偉い人間でなければならぬと考えていた。なま身の人間に訴えるからには、どんなに相手が偉い聖人であっても、条理を尽して、かくかくしかじかであると、説明しなければならぬ。神様よりも手数がかかる。問題が復

3 (初刊本 p.90)

ば、『満洲事変』がおこった時点、すなわち昭和六年に日本との本格的な戦争にはいっていたであろう。昭和十二年の蘆溝橋まで六年の中休みのような年月があったのは、そのあいだに、『戦争への説得』がおこなわれたからだ。具体的にいえば、第二次国共合作である。

最近の文化大革命も、『示威』とみえたり、『弾圧』とみえたりするかもしれないが、本質的には大がかりな『説得運動』にほかならない。

では、文化大革命は何の前ぶれなのか？ それはよくわからないが、ただその運動がふるい時代と思に、訣別を告げようという説得であったことだけは確かである。

「気心の知れた身内」——これが島国日本

私が住んでいる神戸の高台からは、淡路島がよく見える。須磨あたりでは海が汚れてきたので、夏になると淡路へ泳ぎに出かけることが多くなった。

この淡路は神話の島なのだ。イザナギ・イザナミの二柱の神が、最初に生んだのがこの島だといわれている。

ところが、じっさいには、いつ来てもこの島には神話臭というべきものがない。あるとき、私はふと、この島を神話と結びつける要素が、たった一つあったことを思いついた。

その島の大きさだ。

4 (初刊本 p.206-207)

文章は経國の大業

中国の文人が、ほとんど例外なく政治的になることを、日本ではにがにがしく思う人が多いのだ。しかし、それは

——文章は経國の大業にして不朽の盛事なり。

という言葉を、中国の文人がいまだに空疎な修飾語とみていないからである。

文化大革命の記事を読んで、

——どうして作家たちのやっているさきやかなことに、いちいち目くじらを立てるのか？と思う日本人が多いだろう。

——芸術は無頼漢でよからう。

と川端康成が言ったことが新聞に出ていた。

おなじような気持がのぞいている。

※一九七一年初刊本と二〇〇五年出版本の違いを四箇所取り上げました。いずれも文化大革命にかかわる記述で、後者では、四箇所とも、枠で囲った数行がカットされています。陳舜臣さんの文革観に変化があったのでしょうか？

陳舜臣さんは文化大革命をどう見ていたのでしょうか？

この記事は、本通信第23号4頁の再掲です。陳舜臣さんの文化大革命についての見解が仄見え、興味深い内容です。池島信平氏との対談が載った『新刊展望』は、直木賞受賞直後の1969年4月号です。陳さんは、まだ中国の土は踏んでおられなかったわけですが、文化大革命については、既に、メディアなどを通じ周知のはずですが…。『日本人と中国人』の初刊本が出たのはこの対談のほぼ2年後ですが、同著にも、下の枠内と似た記述が見えます。

(編集委員 橘雄三)

精神の改革者はロマンチスト

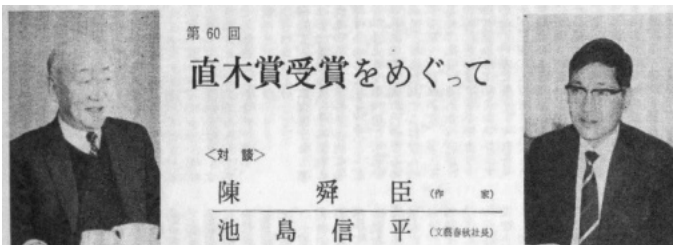
池島

ちよつと話題が変わるんですけど、最近の中国の文化大革命はちよつと私なんかの乏しい知識じゃ理解できないし、ただ、中国という国は非常に大きな国で、万里の長城をつくったり、思いきって儒家の書物を全部焼いてしまったり、日本人から見たらスケールも何十倍も大きい国だから、ああいうことも起こり得るということも言えるが、…。

(中略) ああいうちよつとわれわれの理解に絶する大きな変革というか、実験をいまやっている。いったいこれはどういうことなのか、中国の歴史にこのような例があったんですか。

陳 いまおっしゃった秦の始皇帝の変革もその一つでしょうね。それから下がつて前漢と後漢の間の王莽の篡奪のときも、やはりそういうような人間の精神の改造を志したようなところがありましたね。(中略) 百年ほど前の太平天国のときもそれをやったと思うんです。

だから、ああいうことをやった人は、私は秦の始皇帝にしろ、王莽にしろ、あ



るいは太平天国の洪秀全にしろ、ロマンチストだったと思うんですよ。

(中略)

壁新聞なんかが日本の新聞に翻訳されてるんですが、あれは誤訳ではないんですけれども、ことばのニュアンスが日本と中国ではちよつと違うんですね。たとえば「だれかを焼き殺せ」ということが、そのまま日本語になると非常に強く感じられますが、「殺」というのは意味を強めるだけのことなんです。これは日本に輸入されたことばで「黙殺」とか「悩殺」とか、血のにおいがいいんですよ。中国の殺すということばは意味を強めるだけで、血のにおいのないことばになってるんですね。ところが、壁新聞で「焼き殺せ」というと、日本人には非常に強く感じるんです。これは中国人は非常に気安く使うことばなんです、それほど強い意味では向こうでとられてないと思うんですね。(中略) だから文化大革命のことばも必ずしも正確には伝わっていないような感じですね。



す。不思議です。

さらに、談話の中で、「焼殺」を「黙殺」「悩殺」と同じ用例とし、「中国の殺すということばは意味を強めるだけで、血のにおいのないことば」とおっしゃっています。『日本人と中国人』でも「愁殺」「笑殺」「罵(マ ののしる)殺」という語をあげ、同じ論法で述べています。しかし、「殺」の前に置く語が問題です。手もとの中日辞典で「焼殺」を引くと「焼殺…」が載っていて、「家を焼き払い、人を殺し、…」と訳がついています。確かに、魔女の火あぶりのような事ではないですが…。

陳さんの、文化大革命に対する認識の甘さはどこからきているのでしょうか。

中国の「焼殺」の「殺」は意味を強めるだけで、血のにおいのないことば!?

文化大革命では、劉少奇、彭德懷など実権派(走資派)と称される人たちだけでなく、老舍のような作家、そして一般の市民までが紅衛兵による攻撃のターゲットとなり、その糾弾・暴行で、多くの人が傷害を受け、また、命を落としました。

陳さんは、文化大革命のような例として、中国史上の始皇帝の変革、王莽の「新」、洪秀全の「太平天国」をあげ、当事者三人を、「人間の精神の改造を志したロマンチスト」と、むしろ肯定的に評価し、毛沢東についても、また、同じ文脈で話されていま

文革期、師の身に降りかかった悲しい出来事 趙平著「奇縁」

ここに紹介するのは、文化大革命が始まって間もなく、趙平氏の英語の個人教師の身に降りかかった悲しい出来事です。趙平著『天にむかって歌う』『奇縁』の一部を抜粋引用します。趙平氏は私(橘)の親しい友人です。

著者略歴■趙平(ちょう へい)

1956年、中国貴州省貴陽市に生まれる。66年、文化大革命で父親が走資派として批判され、小学校を4年で退学。以降、文革終了まで「少年労働者」として過ごす。家庭教師より英語を学び、後に、英語通訳を歴任。78年、文革終了後四川大学入学。82年同大学外国語学部日本語科卒業。貴州大学教師就任。87年、天津外国語大学大学院言語学修士課程修了。同大学講師就任。

1991年日本留学。95年、阪神淡路大震災で被災。留学生などの救援活動に奔走する。96年、神戸学院大学大学院法学研究科博士課程修了。

2001年、帰国。淮海工学院大学外国語学院院长、貴州財経大学外国語学院院长などを歴任。

中国語、日本語での小説、随筆多数。

趙平著

『天にむかって歌う』『奇縁』

抜粋転載

そのころ、イデオロギーの領域での知識分子批判が急速に高まった。ことの発端は、ある一人の小学生、Kの草した文章だった。Kは両親にけしかけられ、学校の先生を批判する手紙を書いた。その手紙が、権力の交代を急ぐ恰好の材料として「四人組」の江青に利用され、人民日報に載った。その後、Kは天才少女のように次から次へと文章を出した。中国全土がその攻撃的な激しい口調に乗せられた。知識分子にたいする攻撃が一段と辛辣なものとなっていった。

「けしからん。けしからん。でたらめばかりだ。何も分からない純真無垢な子供を引っ張り出して文字獄を設け、知識分子を陥れる。やり方が汚すぎる。これが青少年の心を毒するものでなくて何であろう。天理はこれを許さない!」

呉先生は十日間ほど反省室に閉じこめられていた。この十日間、若者たちは代わる代わる入っていった。Kの文章とベルトで先生の思想改造を企てた。しかし、若者たちの努力は無駄だった。先生は

自分の非をがんとして認めなかった。業を煮やした若者たちは立つことができなくなった先生を引きずり上げ、壁にもたれさせた。呉先生の胸には赤いペンキでペケを付けられた木の名札がぶら下っていた。一人の若者が少林寺の武術で、地面から飛び上がり、空中で身軽に翻ってまっすぐに蹴った。

若者の革靴は呉先生の胸の名札を直撃した。ガランとした反省室中に響く大きな音と共に、まるで銃弾を受けて炸裂したように名札は割れた。若者が優雅に着地すると同時に、先生の口からは血が噴き出した。

「あんな頑固な反革命分子は見たことがない。まったく」

青年は痰をペツと吐き出して言い放った。

若者たちが、「死んでも悔い改めない臭い知識分子」の先生を家まで運んだとき、先生は虫の息で、話すこともできなかった。病院は師母(※先生の奥さん)と二人の娘の必死の願いを無視し、「反革命分子」である先生の治療を拒否した。師母は二人の娘とともに奔走した。そして民間の漢方薬を買ってきて先生に飲ませた。それ以外、できる手だてはなかった。

翌日になると、先生の口に入れた煎じ薬はそのまま口から溢れ枕

元に流れた。先生は家に戻ってから二日目の夜中に何のことも残さずに帰らぬ人となった。

呉先生が亡くなった後、師母は先生の蔵書の半分を僕にくれた。

「趙さんと主人との出逢いは奇縁でしたね」

師母は感慨深げに言った。

■本号前頁の発言のように、陳舜臣さんは文革を事実と違い、はるかに穏やかなものにとらえておられます。

しかし、文革での推定死者数は数百万人から二千万人以上ともいわれています(ウィキペディア)。

